

## トピックスⅢ

### 国内で36年ぶり輸入感染症としての狂犬病発生

2006年11月16日および22日、厚生労働省は、フィリピンから帰国した60代の男性2名が、いずれも2006年11月に国内で狂犬病を発症したと発表した。

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/11/h1116-2.html>

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/11/h1117-4.html>

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/11/h1122-1.html>

2名とも8月にフィリピンを渡航中に犬にかまれたエピソードがあり、いずれも現地で曝露後のワクチン接種を受けていなかった。

このことを踏まえて、厚生労働省は、検疫所、自治体及び日本医師会に対し、狂犬病の流行地域に渡航する者に対する感染防止のための注意喚起ならびに流行地域で動物に咬まれた者への曝露後ワクチン接種等の対応について、周知徹底を通知した。

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/11/h1116-2.html#besshi>

WHOの報告によると、2004年現在の世界における年間死亡者数は55,000人、曝露後ワクチン接種者数は1,000万人と推計されている。厚生労働省の報告によると、わが国における狂犬病の発生状況は1970年に狂犬病流行地渡航中に犬に咬まれ帰国後発病・死亡した輸入症例が1名報告されているが、国内発生は1953年3名、1954年の1名を最後に報告されていない。また、犬における発生も1953年176頭、1954年98頭、1955年23頭、1956年6頭を最後に1957年以降発生報告はない。

狂犬病発病後は有効な治療法がなく、致死率はほぼ100%とされているため、ワクチン接種による発症予防は極めて重要である。接種のスケジュールは、狂犬病流行地渡航前の曝露前免疫としては、1mL/回を4週間隔で2回皮下接種し、その6-12か月後に追加接種する。通常、3回の基礎免疫により1年から1年半の予防効果が期待で

きるが、長期に予防する場合は、1-2年に1回の追加接種が望まれる。渡航までに時間的な余裕がない場合でも、少なくとも渡航前に2回の接種はすませたい。WHO方式として、0, 7, 28日の3回、1mL/回を接種する方法もある。一方、狂

犬病あるいはその疑いのある動物に咬まれたり、唾液に接触したりした場合は、0, 3, 7, 14, 30, 90日の6回、1mL/回を接種する。ヒト（またはウマ）抗狂犬病免疫グロブリンを接種する予防方法もあるが、国内での入手は困難である。